

玄耳と

猫と

漱石と



安田満

玄耳と

猫と

★ 漱石と

安田満

安田 満（やすだ・みつる）

一九一五年大分市生まれ。戦後、

朝日新聞東京本社および西部本社に勤務。現在、朝日新聞客員。

文芸誌「火山地帯」同人。

詩集『遅暮』、創作集『ドスキ
ンの服』。



げんじ ねこ そうせき
玄耳と猫と漱石と

一九九三年三月十四日 発行

著者……………安田 満

発行者……………土橋寿子

発行所……………邑書林

東京都目黒区中根二一七四〇三 千
電話番号〇三(三七二四)三〇三二
郵便振替 東京〇一五五八三二

印刷所……………三和印刷株式会社

製本所……………株式会社渋谷文泉閣

定価……………一〇〇〇円(本体一九四二円)

ISBN4-946407-65-0

目次

玄耳と猫と漱石と

7

南洲先生大将服焼片

81

あとがき

162

解説 大河内昭爾

165

装幀
間村俊一

玄耳と猫と漱石と

玄耳と猫と漱石と

第一章

大正元年十一月二十日、東京朝日新聞社会部長の玄耳洪川柳次郎は、芝浦の旅館竹柴館に宿泊中の村山竜平社長あてに、速達郵便で辞表を送った。

その日、玄耳は退社の肚をきめて、いつものように詰襟の黒い小倉織の服を着用、滝山町の社屋に出社した。

特別に自分の事務卓を片づけることもせず、とどいている郵便物を見たあと、調査部に行つて部長の楚人冠杉村広太郎に会った。

玄耳と楚人冠は、生年はどちらも明治五年、玄耳は四月、楚人冠は八月で、玄耳がわずかに早く生まれているが、入社は楚人冠が三年あまり早かったにもかかわらず、調査部長のかたわら、玄耳のもとで社会部次長でもあった。英語に堪能で、駐日アメリカ公使館の翻訳官をしていて東京朝日に招かれた人物、ロンドン特派員の経験もあり、ハイカラと見られがちであったが、玄耳は、あるとき楚人冠が見かけによらず、実は肚の据わった

重厚、剛直な紳士であるを知って以来、その人物を推重、胸襟を被いて付き合ってきた。玄耳は楚人冠に退社の決心を告げ、どうか慰留運動などはしないでもらいたい、と頼んだ。

楚人冠は多くを言わず、困るだろう、と生活の先行きを問うた。

玄耳は、大いに困るが、いまは当面の面倒からのがれただけだ、あとのことはあとで考える、と答え、退社が発表になるまでもう出社はせぬから、それまでは病氣とでも言いつくろっておいてほしい、発表になれば引き継ぎに一度は出てくる、と告げた。

そうか、それではさようなら、と楚人冠が言い、ああ、さようなら、と玄耳が応じて別れた。

玄耳は社屋を出ると、どこぞで辞表をしたためねばならぬが、と思案し、前夜、陸軍軍医学校に勤める同郷の親友、長野軍医正から電話があったことを思い出し、あそこなら筆硯を借りられると考え、数寄屋橋から青山行きの電車に乗った。

九段上の軍医学校に行くには三宅坂で乗り替えねばならなかったが、玄耳は辞表の文句をどうしたものかとあれこれ考えめぐらしているうちに、うっかり三宅坂を乗りすぎて次の平川町で気づいて下車した。

とんだしくじりをしたものだ、やはり心中、平静ではないのか、と自分を憐れみなが

ら玄耳は歩いて三宅坂に引き返した。

軍医学校で長野軍医正に面会を申し入れると、いま授業中とあって、応接室でしばらく待たされた。

授業を終えて出て来た長野軍医正とは、やめることにきめた、おう、やはりやめるかと短いやりとりをしただけで、硯を借りると「永々お世話になりましたが、此度一身上の事情に依つて辞職致します」という文面をしたためた。

長野軍医正は真向いの椅子に腰掛けて、黙って煙草を吹かして、玄耳が筆を運ぶのを見守っていた。

したため終わると、玄耳は誤字、脱字が無いかと注意して読み返し、これでいい、いっさい落着、と胸中につぶやいて自分に言い聞かせただけで、別段の感慨はなかった。

では失礼する、と玄耳が言つて退出しようとしたとき、長野軍医正が聞いた。

「このあと、どうする。直樹君と正樹君は僕があずかる」

頼む、よろしく頼む、と玄耳は二人の男児を依頼した。

直樹は長男で来春は中学を卒業する。正樹は中学在学中だ。玄耳は退社を決意すると、法学科志望の直樹に、陸軍士官学校へ進むように求めた。退社すれば定収入が無くなり、生活は不安定となる。陸士なら、さほど費用がかからぬからやれる、というのが玄耳の

目算であつた。玄耳は東京朝日にはいる前は陸軍の法務官であつた。陸軍には縁が深く、知己も多いという点も、直樹に陸士をすすめた一理由である。二男の正樹は卒業までにまだまがあるので、急ぐに及ばぬと考えていた。

玄耳は長野軍医正に言葉をにつづけた。

「退社が社内で発表になるにはなお数日かかるだろう。それまでに身邊を片づける。雪子と貞樹は船尾夫人に見てもらおう。書生と婆やには暇を出す。犬と猫も、何とかする。結構、多忙だ。退社が発表になれば、多少の金はいるから、当分は困らない。世間には、退社の由を紙上に広告しておいて、わしはシナに遊びに行く。ゆるりと見たいところを見てまわろうと思つてゐる。シナは清朝が倒れて、新しい国に変わろうとしてゐる。大変革の時期に、実地に見られるのは有難いめぐりあわせだ。帰国してからのは、そのときになつて考えるが、離婚話が難儀の種だ。それを思うと、ちと気が滅入る」

玄耳はまっすぐに長野軍医正の目に見入つてしゃべつたが、気弱な言葉でしめくつた。長野軍医正は玄耳の故郷、佐賀県杵島郡西川登村の村塾での悪童時代からの古い友人だ。親友中の親友である。親友には、何でも腹藏なく話せる。玄耳夫婦が折り合いが悪く、妻イヨは幼い二児をつれて実家に帰つていて、離婚訴訟を準備中であることも打ち明けてある。夫婦のあいだの事態の成り行きは細大洩らさず長野軍医正の耳に入れて

ある。弱音を吐くのを、恥じ入らねばならぬ間柄ではない。

「うん、僕でできることは何なりと言ってくれ給え」

長野軍医正も、玄耳の目を見て言った。

「有難う」

手入れの行きとどいた長野軍医正の鼻下の八字髭がいかにもたのもしく玄耳には思えた。

玄耳が帰宅したのは午後一時ちょっとすぎであった。つぎの年に小学校にあがる貞樹と、書生の片倉が玄関に出迎えた。

貞樹はいつもとちがって父の早い帰宅をよろこび、大きな声で、お父さん、お帰りなさい、と叫んだ。片倉は、ちよっといぶかしむような表情を浮かべて玄耳の面色を見た。身体の工合でも悪くて早退けたのかと思ったのかも知れなかった。玄耳は退社するとは、子供たちにも、書生や婆やにもまだ明かしてはいない。

玄耳は貞樹の頭を撫でて、勉強しとったかな、とやさしく聞いた。貞樹は、はい、と大声で答え、声をいっそう張りあげて「秋七月丁亥、公、宋公燕人ト会シテ于丘ニ盟フ。八月壬辰、陳公躍卒ス」と前夜、父から習った春秋経の文句を間違ひなくそらんじた。

「おうおう、ようおぼえとる」

玄耳は貞樹をほめた。

ひと月ほど前から玄耳は貞樹と、姉の日本女子大学付設豊明小学校五年生の雪子に、夕食後のひととき春秋経の素読を授けはじめた。日に十五分か二十分ほどのわずかな時間であったが、自分が頑童のころ村塾で河崎、中尾の二人の漢学先生から四書五経の素読を習ったことを、いま二人の子に授けているのである。

自分の場合は、その時代の漢籍勉強の方式どおりに大学、中庸、論語、孟子と四書を終えて詩経、書経を経て春秋に進み、礼記、易経で五経をあげたものだが、玄耳は自己流の考えがあつて、貞樹たちには春秋からはいふことにした。

日本人は何を学ぶにしても、漢学の素養がなければ知識の吸収ができぬ、漢字漢学は幼くて身につけるに如かず、と玄耳は固く信じている。事実、幼い二人は、玄耳が教える片端から、乾いた砂が水を吸うように素読をおぼえる。

わしも子供のころ、あんなであつたらうか、と玄耳が驚いて振り返って思うほどの上達ぶりを二人の子供が見せるのは楽しみで、教える励みになった。

玄耳は留守中に来客も電話もなかったと片倉から聞くと、二階にあがって、書斎兼用の居間にはいった。妻と別居しているので、身のまわりのことは自分ですることにして